

かぐらおか

第 85 号

平成 7 年 12 月 1 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 放射線部 岩上 祥子)

雪の鎌倉

若者よ英語力を鍛えておけ……………小川 勝洋… 2	クラブ今昔(将棋部今昔)……………岡沢林太郎… 7
卒後10年に思うこと(第7期)……太田 勲男… 3	研究室紹介……………病理学第二講座… 8
旭川に来て……………フリオ・セッサー… 4	研究室紹介……………数学… 8
……………ドゥエーニース	体育大会実施される…………… 9
旭川に来て(原文) ……フリオ・セッサー… 5	解剖体慰霊式…………… 9
……………ドゥエーニース	公開講座盛況のうちに終了…………… 9
解剖学実習を終えて……………秋野ひかる… 5	教官の異動…………… 9
クラブ今昔(卓球部の歴史から学ぶこと) 谷山 宣之… 6	スキー教室参加受付中…………… 9
クラブ今昔(陸上競技部)……………武居 正明… 6	窓 外……………柴田 好…10
クラブ今昔(映画研究会の唯一の活動)…西岡 健吾… 7	「かぐらおか」84号訂正のお願い……………10



若ものよ 英語力を鍛えておけ

病理学第一講座 教授 小川 勝洋

小生にとって英会話は苦手とするものの一つである。かつて20年前にカナダに留学した際、約半年間英会話学校に通ってみっちり訓練したつもりであったが、いざ現地に着いてみるとその程度の実力ではとうてい通用しないことを思い知らされた。初めて降り立ったバンクーバー空港では関税の係官にしっかりと質問され全く理解できずに弱り果てた。あとで考えると、当時、カナダ国内に持ち込むおみやげは何ドルか以上になると課税の対象になったのであるが、バックの中にあった成田空港で買ったヘアオイルが自分自身で使うのか、誰かへのおみやげかと聞いていたらしい。結局、こちらがあまりにチンプンカンプンなので質問する方もイヤになったらしく、もう行っていいということで事なきを得た。

その後、トロントで約2年半過ごし、多少は上達したが、帰国後は退化の一途をたどるばかりである。小生の留学した研究室はカナダ、アメリカの他、マレーシア、ベネゼラ、タイ、中国、台湾、香港、インドなど様々の国の人が集まっていたが話される英語もそれぞれのお国訛が強く、まともな英語で話すのはごく少数であった。しかし、彼らの間ではコミュニケーションにはいっさい不自由はないようで、特に台湾人とインド人の英語ははたで聞いているととても同じ言語とは思えなかったが、互いにまくし立てて言い合いをする場面に遭遇したこともままある。そんな中で小生の英語力は最低で、中学から大学まで8年間も勉強していながら、なぜにこうまで役に立たないものかと日本の英語教育を恨みに思ったものである。

非英語圏の人たちが英語を流暢に使えるのは、子供の頃から教育の場で英語が使われる機会が我々よりもはるかに多いため、特に高学年になるほど母国語での教育は難しくなるそうである。それに比べると日本では英語が使われるのは学校の英語の時間くらいのもので日常生活の中では皆無に近い。また、

大学の教科書でさえも日本語で間に合うし、小説などでも翻訳されたものがあるから原語で読む必要はない。すなわち我が国の文化水準の高さが英語の必要性を生まず、したがって読んで理解するまでではできてコミュニケーションの手段としての英語までには至らない。

授業に追いまかれる学生時代に英語の必要性を実感することは難しいかも知れないが、若いうちに英語力を鍛えておいて絶対に損はない。外国語を学ぶことは新しい考え方や感じ方に触れることができるし、さらに何と言っても、医学を研究する上では英語力がものをいう。新しい情報を収集する能力は英語を読むスピードと正確さに依存するし、論文は日本語で発表するよりも英語で国際誌に発表した方がはるかに高い評価を受ける。また、聞いたり話したりする能力が高ければ、まだ誌上に発表されていない情報を外国の学会や外国人研究者とのコミュニケーションを通じて得ることができる。科学の世界では今や英語は地球上の共通言語である。

先日、“医学部における英語教育の改善のためのワークショップ”というのがあり、参加させていただいた。全国の大学から40名以上の参加者があったが、多くの大学では近年、英語教育の力を入れている様子がかがえた。ある大学では自由科目として英語を開講しているがその担当者を学内の講師以上の教官に募ったところ、30名以上の応募があったそう、いかに力を入れているかがえる。

英語は聞く、話す、読む、書くの要素からなるが、我々の弱い部分は聞くことだと思われる。すなわち正確に聞き取れないから音として真似ができない。その点を改善するには英語を聞いて正確に反芻するのが最も有効な訓練で、それにより言語中枢間を結ぶ神経線維が太く鍛えられ、日本語を介さない英語の回路が頭の中に形成されるそうである。英語力を鍛えるのは一種のスポーツトレーニングに似ている。



卒後10年に思うこと（第7期）

日鋼記念病院 眼科 太田 勲男

旭川医大を卒業してはや10年が経過したわけですが、思えば、私達7期生は、今の大学入試センター試験の前身である共通一次試験の一期生でした。当時は、諸先生方より「レベルが低い」といろいろお叱りをいただいた訳ですが、よい意味での開き直りがあって、のびのびと個性的な連中が多かったように思います。皆が今、どのようにしているか、全ては知りませんが、それぞれの道で活躍しているものと信じています。

私の場合、眼科の門をたたいた理由はいろいろありますが、「人数の多い所では芽が出ないのではないか」という漠然とした打算が最大のものでした。いざ、入局してみると、手術治療が盛んに行われていることに目がひかれました。目の手術と言えば、世間ではまだまだ最後の治療手段と考えられていた時代、患者さんが大変感謝されるのを見ながら、先端の技術を勉強できることは、研修医にとっても誇りでした。幸いなことに、医局員の数も少なかったため、自ら多くの症例を経験する機会にも恵まれました。このため、度胸だけは早くから一人前になれたように思います。

卒後4年目から2年間は、美唄労災病院に勤務、この病院は私以外は皆、北大の医局より派遣された先生で、少々寂しい気はしましたが、視野を広げる機会ともなり、大変有意義な時期でした。その後、大学で再び研修を受け、平成5年より、ここ室蘭市の日鋼記念病院に勤務しています。この病院は「地域のニーズと市民の信頼に応える医療」を理念に掲げる少々厳しい病院ですが、他大学の医局に進んだ方を含め、旭川医大卒業生の先輩、同期、後輩の先生が多く、大変心強く思っています。ある看護婦さんから「先生の同期はこい（あくが強いという意味でしょう）人ばかり」と言われたことがありますが、これには苦笑してしまいました。

最近感じることは、手術すれば必ず治ると考える

患者さんが多いことなど、世間のニーズが10年前とは大きく様変わりしたことで、医療に携わる者とのギャップを、いかに専門技術やインフォームド・コンセントで埋めていくかが重要となっています。また、患者さんの全身を管理し、高度な医療を提供する総合病院の役割も重くなりつつあるのも実感です。このような中、眼科と言えども複数の医師による体制が必要で、とうてい一人ではカバーしきれない専門分野を分担したり、チーム医療を行わなければなりません。正直言って、私にとっては少々衰えた体力も隠せない理由のひとつではありますが、旭川医大眼科の医局員数の増加の恩恵を受け、この日鋼記念病院でも眼科医2名体制で診療にあたることができ、これ幸いと思っています。

このように、自分自身、満足のいく有意義な10年を過ごすことができたことは、ご指導をいただいた保坂前教授、吉田現教授をはじめとする医局内外の諸先生、ご協力をいただいたスタッフの皆さんのおかげであり、ここに謝意を述べなければなりません。

さて、10年が人生の節目の単位として適当であるかどうかは別にして、年代ごとに果たすべき役割は変わっていきます。また、その背景となる社会も、進歩とそれにより生じた矛盾、歪みの解消を繰り返し、刻々と変化を続けています。私達、医師の仕事も、専門分野や勤務形態だけでなく、その内容も変化しています。個人の才能は十人十色であり、その受け皿は広がりこそすれ、狭くなることはないはずです。医師としての最低限の義務は遵守し、前向きなビジョンを抱きつつ、少々凶々しくても得意な分野や場所で個性や才能を発揮していくことで、社会に貢献することができればと願うものです。



旭川に来て

産婦人科学講座 フリオ・セッサ・ドゥエーニャス

はじめに、私がこの「かぐらおか」に執筆する機会をいただきました旭川医大の「かぐらおか」編集部に感謝致します。

まずは私の自己紹介をさせていただきます。私はペルーから来たフリオ・セッサ・ドゥエーニャスで、現在旭川医科大学の産婦人科学講座の大学院で勉強中です。専攻は婦人科腫瘍学で、この分野における臨床研究と、最新の分子生物学の技術を駆使した基礎研究を行っています。

さて、私の来日に関して最も頻繁に聞かれる質問は「あなたはなぜ日本に来たのですか？」ということでしょう。以下に述べるのがこの質問にある程度答えていると同時に、私の日本での日常生活や研修ならびに研究状況を想像して頂く助けになると思います。私が日本へ来た理由は数多くありますが、その中でも、私の母国とは明らかに異なる日本文化を深く知ること、さらに最先端の学術的研究ができるというのが一番の理由です。歴史的に日本と南米の国々は密接な関係を続けています。その中でもペルーは1873年に日本との友好関係を確立した最初の国で、ブラジルに次いで2番目に日系移民が多く、その数およそ76,000人にもおよびます。フジモリ大統領の就任が両国の友好の機運をさらに盛り上げました。日系ペルー人はこの友好関係に大きな役割を果たしております。私たち両国の相互依存の関係は人々の想像以上に急速に深く進展しております。他の南米の国々の中でペルーほど日本から衛生、教育、エネルギーの分野で無償の技術援助を受けている国はありません。そのような日本の寛大な行為は、ペルーの社会的、地域的发展を支える日本政府の貢献ぶりにもはっきりと表れています。

私が研究をするために旭川に来てから約3年になります。来日目的を果たすことはなかなか容易ではありませんが、この3年間は私にとって極めて貴重な経験であります。

私の最初のカルチャーショックは、それを上回る私の研究をご指導くださる産婦人科学講座石川陸男教授のご尽力のおかげで和げることができました。でも、言葉の壁との闘いは来日当初からずっと生活上大きな障害となっています。

旭川にいて、私の一番価値のある経験は、私の生まれ育った国々と多くの点で対照的な日本の生活様式を、直接日本の人々から習う機会があるということだと思います。日本は研究を行ううえで学問の最先端にあって、世界で最も刺激的な国の一つです。旭川医大のスタッフによって私に与えられた数多くのチャンスは、私が自国では得難い学問の分野の知識を広げてくれました。私はそれらのチャンスを与えてくださった人々に深く感謝しています。

旭川は日本の中で住むには最も適した場所の一つだと思います。環境は清潔で四季もはっきりして美しく、雪降る冬はまた格別です。私にとって旭川は第2の故郷なのです。妻と私はこの地で結婚することを決め、旭川で結婚式を挙げたことは私たちの人生において最も忘れ得ぬものとなりました。

最後になりますが、私はこの3年間、この美しい地で過し、専門分野の研究や勉強ができたことをたいへん幸運に思っています。私がこの分野におけるおよそ全ての知識と研究成果は産婦人科教室の皆様のおかげで、皆様のご好意とご指導にとっても感謝しております。私はあと2年少々で旭川を去らなければならず寂しい限りです。でも、今後どんな立場になっても私たち夫婦はいつも日本の友人であり、日本文化を人々に伝えることができることでその寂しさが癒されると思います。

(原文は5ページ上段です)

(原文は5ページ上段です)

THE SIGNIFICANCE OF ASAHIKAWA

First of all, I would like to thank Asahikawa Medical College to allow me to jot down a few words for this magazine. Before that, allow me to introduce myself. I am Julio Cesar Dueñas, from Peru, studying Doctor Course in the Department of Obstetrics and Gynecology at Asahikawa Medical College.

My major is Oncology Gynecology, and I am doing clinical studies and basic research in this field using modern Molecular Biology techniques. Possibly the most frequently asked question put on those visiting Japan is "Why did you come to Japan?" The following few lines attempt to answer this question in part, and provide an image of living and studying in Japan from my perspective. The reasons are many, however the main driving force was to pursue my academic studies whilst gaining an understanding of a culture that is significantly different to my own. Historically, Japan and South America countries have enjoyed good relations. Peru was the first country in the region to establish relations with Japan in 1873, and it has the second largest community of Japanese immigrants after Brasil, around 76,000. The election of President Fujimori boosted already positive public sentiments in both countries. Japanese - Peruvians play an important role in this respect. "Our relationship of interdependence is growing much faster and deeper than people imagine". No other country in Latin America has received from Japan the amount of non-refundable technical assistance as Peru has in the fields of Health, Education and Energy. Such generosity is a clear indicator of the Japanese government's commitment to support the social and regional development of Peru. It has been almost three years since arriving in Asahikawa to undertake a research course and I am happy to say, that although it has not been easy pursuing these goals, it has been a rewarding experience that I am glad I undertook. My initial culture shock was a little dampened by the more than welcome efforts by Professor Mutsuo Ishikawa, my academic supervisor and medical staff of Obstetrics and Gynecology Department. From the beginning, the battle with the language began and has been the major obstacle in living in Japan.

During my stay in Asahikawa, the most rewarding experience I think has been the opportunity to learn from the Japanese people a way of life that contrasts in many ways to that in which I was raised. On the academic front, Japan is one of the most stimulating countries in the world in which to conduct research. The opportunities provided to me by staff of Asahikawa Medical College have broadened my knowledge in an area of study which is difficult to take in my own country. To these people I am most grateful. I think Asahikawa is one of the best places to stay in Japan, the environment is clean, it has four distinct seasons and the snowy winter makes it even more special. To me Asahikawa is my second home town. My wife and I decided to get married here which made our sojourn in this country an unforgettable part of our life.

Finally, I have been extremely fortunate for the past three years to live in the land of Beauty and be able to search and study in my field. I owe almost all my knowledge and achievements on this field to Gynecology Group. I hasten to thank Professor Ishikawa and OB/GYN staff from the bottom of my heart for the kindness and guidance during this time. Some day, I will leave Asahikawa but I am consoled by the thought that we will always remain as Japan's good friends and will propagate our knowledge of the Japanese Culture at any new post.



解剖学実習を終えて

第3学年 秋野ひかる

入学以来、最も心待ちにし、と同時に最も恐れていた？解剖学実習が4月から約3ヶ月間、ほぼ毎日行われました。人の亡骸に手を下すライセンスは、医師になろうとする人のみに与えられていること、また人体構造を探る機会は、この実習しかなく、一生に一度のチャンスだということを考えると、御遺体からすべてを吸収できるかと不安にされていました。そんな気持ちからか、解剖の初日、実習室に始めて足を踏み入れた時は、異空間に入り込んだような感じがし、誰もが緊張し神経質になっているのがわかりました。しかし、2～3日もすると、解剖での実際上の必要性により「御遺体に向かっているのだ。」という生の感覚や死の概念とは、かけ離れたものになってしまいました。

この実習では、多くの知識と技術が要求され、何よりもまず、膨大な量（その上ラテン語）の暗記に苦労させられました。筋肉、血管、神経、どんな小さな部位にも名称がつけられていて、「誰がこんな

名前をつけたの～。」とうらめしく思えました。また、重要な箇所を露出するための脂肪除去だけに実習の半分以上の時間を費やしてしまったり、不慣れな手で解剖するため、見たい箇所を壊してしまい、教科書やアトラスの美しい解剖図とは全く違って見えることもありました。自分の準備不足（不勉強）がそのまま手際の悪さとなり、解剖班のメンバーや、そして誰よりも御遺体に対して申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

考えてみると、御遺体は、人体の秘密、美しさ、精巧さを無言のうちに教えて下さった最良の先生だった気がします。そして、私が一番学びたいのは、構造など形而上のものではなく、「私の遺体を医学教育にどうぞ」と自ら身を投げ出し献体をして下さったその精神です。

実習を終え、献体して下さった方への感謝の気持ちとともに、医師を志す者に託された期待を強く感じています。御遺体へのお礼の意味でもこの実習で学んだことを社会に還元できるような医師に成りたいと決意を新たにしました。

ク ラ ブ 今 昔

卓球部の歴史から学ぶこと

第4学年 谷山 宣之

自分は、卓球部に在籍してまだ日が浅く、「歴史を綴るなんて先輩方に申し分けない！」と思うのですが、自分が知る限りで歴史を振り返り、現在に生かしていくことが自分の役割と考え、述べさせて頂くことにしました。

卓球部は旭川医大設立と同時に結成されました。低学年より始まった卓球部は、正しく「ピンポン」そのものであったそうです。年々後輩が入り、部員が増加、ほとんどが男子で、当時、旭川医大の女子入学者が一桁程度で、卓球部には、2～3名しかいなかったそうです。当時の顧問は高村先生でありました。年々、技術は向上し、道医体、北医体で優勝し、東医体でも好成績を取めるまでに至りました。卓球の若々しい発展に御尽力下さった高村先生は転勤なされ、現在の高学年の学生には懐かしく思う英語科の平野先生が中心者となって頂きました。「私は部員だから、顧問にはならない！」と言われていましたが、それが逆に、部員と一緒に練習する中で、部

員への励みと、技術向上につながったものと思います。

今でもよく飲み会などで、「昔、すっげえ強い人がいたんだよ！」と語り継がれているのは、湯山先生です。彼が卓球部の天下をとった時（部長になった時）の練習は、『殺人的』『狂人的』（本人が狂っているわけではない）とかと言われ、相当厳しい部でありました。そういった状況は、今では考えにくい（できない）のはあるのですが、そういう部長について行ける部員さんであったからでしょう。男女とも、北医体、東医体などで好成績を取め、それ以来、「東医体優勝」という目標を掲げ、大成長を遂げることができました。この様に、卓球部の歴史を振り返ってみると、厳しい時代と、サークル的な雰囲気の時があるにしても、素晴らしいチームワークで好成績を残されました。こうした伝統を受け継ぐべく、さらに卓球部の発展に尽力して参りたいと思います。

歴史といっても具体性の無いものとなってしまいましたが、他のサークルにおいても、先輩方が作り上げた伝統の宝を探がしてみてもはどうでしょうか。

陸上競技部

第5学年 武居 正明

旭川医大陸上競技部は、昭和49年5月22日に誕生した。当時2年生であった高木勇先生を初代主将として美甘和哉先生を顧問として2年生9名、1年生1名でのスタートであった。その後、順調に成長し、昭和55年の東医体で稲尾茂則主将の元、早くも初の総合優勝を達成する。実に昭和54年からの12年間で総合優勝4回、準優勝6回、3位2回と驚異的な成績をおさめ、まさに黄金時代、その強さたるや、かつての巨人か西武なみである。個人でも、東医体優勝者は多数おり、北海道インカレ優勝者のみが出場できる日本インカレ出場者も、小黒恵司先生、山本長史先生、三浦亮先生、加藤弘明先生の4名を輩出している。

黄金時代を支えた強者達は多数にのぼるが特筆すべき存在は、7期の山本長史先生である。高校時代インターハイ1500M決勝で優勝争いを演じた程の実力者は、1年時から東医体で連勝を続け、1500、5000、3000SCの3冠王となる。道インカレを制すること4度、5年時には北海道選手権優勝、国体北海道代表、

東日本縦断駅伝道代表と、名実共に北海道No.1ランナーであった。山本先生以降、長距離陣は6年時3000SC優勝の船越洋先生、スキー部のスーパーエース、石原敏道先生、小野沢司先生、鹿野哲先生、福家信二先生など豪華メンバーをそろえる。

短中距離陣は、100のスペシャリスト三宅博久先生、200Mの前田高宏先生、オールラウンダー野津司先生、マイルリレーの小林伸行先生などを中心に発展する。最近では、400、400Mハードルの加藤弘明先生が、インターハイ3年連続出場を果たした400Mハードルで、無敵を誇った。また、800M3連覇の浅野克則先生、800M優勝の市村健先生と非常に人材豊富である。

フィールド陣では、三段跳びの小黒恵司先生、やり投げ4連覇の三浦亮先生、やり投げの横田英典先生、オールラウンダー原則行先生などが活躍された。最近では現6年の城田誠さんが走り高跳びで優勝している。

現在は衛藤雅昭先生を顧問として約10名での活動が続いている。ここ数年は東医体などで目立った成績こそあげていないが、皆陸上競技を楽しみ、日々練習に打ち込んでいる。

“映画研究会の唯一の活動”

第2学年 西岡 健吾

去年まで、毎年六月に行われる学校祭に、我々映研は映画を上映していました。我が部はここ三年程、部長、メンバー構成共に軟式テニス部の部員で占められ、前々年は佐藤恒先輩（現先生）が、“麗しのサブリーナ”、前年は蓮池史画先輩が、“グリーン・カード”を上映したのですが、例年ともあまり広報活動をしなかったせいか観客は平均十名程度と、惨々たる内容でした。せっかくいい映画なのに……、と思った私は、私が上映する番になったらしっかり客寄せして、それも体育館に押すな押すなの大盛況にしてやろうと意気込んでいたのですが、今年为学校祭は例年と趣向が変わり、コンサートや花火などの新企画が目白押しとなったおかげで採算がとれない映画上映は見事ボツになってしまったのです。私は“ビッグ”を上映するのが長年の夢だったので…。

それにしても、年間の活動が“上映”のみではちと寂しいのではないか、とお思いのアナタもいるで

しょう。その通り、私も寂しく思います。私も弱輩者ながら部長という立場にあって、よし、自分達で映画を撮ってみるか、と思ったところ、「自分達」といっても「自分」以外の「達」がないことに今さら気付く次第です。今年、一年生のための部活紹介で私は家からネコまで連れて来てショート・コントをしたところ、大評判（だと思ふ）を得たので、一年生はたくさん入ってくれるかな、と期待していたのに一人も入らなかったことが、今に至る映研の衰退の原因でしょう。

思えば他学部と違い、医学部の学生はそういった文化的活動が少ないと思います。勉強がいそがしいから、というのは理由にはなりません。もしそういう輩がいるとしたら、彼にそう言わせているのはいわば“医学部優越主義”それであるように思えます。

“勉強”は確かに、医者になるためには必要不可欠なことです。しかし私は、医者になるには、“勉強する”ではなく、もっと包括的な意味で、“知る”ことが、必要なことだと思うのですが…。

将棋部今昔

第4学年 岡沢林太郎

旭川医大将棋部は、昭和50年に結成された部活です。創部当時は、盤・駒の数も少なく、先輩方が道具を持ち寄って活動を行なっておられたそうです。

創部から現在までの部の大会成績ですが、体育系の部活のように『かぐらおか』に掲載されるわけではないので、ほとんど知られていませんが、道内大学の全校と対等に戦ってきた数少ない部の1つでありました。昭和50年代には春秋に行なわれる道内大学将棋大会団体戦で、常に優勝を争い、結果として優勝こそなかったものの、惜しくも準優勝ということが数多くありました。また最近では、平成4年度から3年間、春期大会団体戦連続3位（特に平成6年度は北大（全学）を6-1で破るといふ快挙も成しとげました）と名門復活を果たしました。

また個人戦でも全道学生大会で準優勝された先輩も3人おり、全国大会である学生名人戦にも出場されております。

現在の活動は、毎週月～金の昼休みに第6セミナ

一室の奥の一角で、主に実戦、定跡研究を中心に行なっています。他に2ヶ月に1度、例会も行なっています。これは部員同志が大会さながらの緊張感でリーグ戦を行なうものです。部員数は現在15名ほどですが、部員でなくとも部室で友達と将棋を指して楽しんでいる方もおり、和気あいあいとした雰囲気の中で、棋力の増進にはげんでいます。

また毎年医大祭のシーズンの部員と職員の方や学生の希望者が参加して行なわれる学内将棋名人戦を開催しています。（昔は医大祭のイベントの一環として人間将棋を行っていたこともありました）

このように精力的に活動していますが、今年は先輩方の卒業による戦力ダウン・部員の減少により、春季全道大学大会に出場することができませんでした。しかし羽生6冠王の出現による将棋ブームを反映して（？）過去に類を見ないほど多くの新入部員が入り、来年の大会出場に向けて活動しています。

今後は、部活発足から現在までの先輩方の努力・栄光を思い起こし、さらなる精力的活動を行なっていきたいと思ひます。

研究 室 紹 介

病理学第二講座 木村 昭治

かつて我々はある種の疾患が人によってかかりやすかったりそうではなかったりするとの説明を「体質」の違いという漠然とした言葉で片付けていた。そのうちの一部が免疫応答遺伝子により説明されて以来初めて科学の検証を受けることになった。今や抗原が細胞に接触して以後T細胞に提示され実際にその作用を表わす全ての過程が、細胞生物学、生化学、分子生物学、発生生物学等あらゆる手段により解析され、分子レベルで各現象の説明が可能なレベル迄到達するに至った。これからの免疫学特に医学部における免疫学はこれ迄に得た知見を実際に人の病気の予防、治療に応用する方向へ進むと考えられる。

当講座は創設時より主要組織適合抗原 (MHC) と疾患感受性をテーマに研究を進めて来たが、現在はMHCに結合する抗原ペプチドの解析を中心に免疫反応における抗原提示機構、T細胞リセプターとの相互作用を分子レベルで解析している。例えば北海道に多い白樺アレルギーの原因抗原ペプチドを同

定したのもそのうちの1つであり、さらにMHCの特定の対立遺伝子に正の相関のある疾患例えば若年性糖尿病の原因ペプチド、又癌に関しては腫瘍特異抗原ペプチドの探索等を行っている。研究の中核を成すのは大学院生・研究生であり随時経験を積んだ者が指導する。何人も学問の場では対等であり、これなくして研究活動は成立しない、というのが当教室 (片桐教授の) の方針であるから教室のふん囲気は非常に自由である。毎年数回テニスを含めたレクリエーションのための小旅行があり、各々楽しんでいる。

一方、病理学教室の教育、診療の一環として剖検・生検を第一病理学講座と協力して行っている。

自分でアイデアを持っている人、エスカレーター式医師養成にあき足らぬ人、テニスの好きな人等学生・卒業生を問わず、君達の訪問を我々は待っています。



数 学 山内 一也

数学教室は1974年4月1日に専門7講座と共に増設され、北海道教育大学教授であった安田 博 (故名誉教授) が初代教授として着任された。以来1991年3月に定年退官されるまでの17年間その任に当たられた。同年4月鹿児島大学教授であった小生 (山内一也) が教授として着任し現在に至っている。

当教室の研究分野は微分幾何学です。初代教授であった安田先生は微分幾何学の1分野であるフィンスラー幾何学の研究を長年にわたって続けられ多くの論文を発表されました。微分幾何学は大雑把に言えば曲がった空間 (これをRiemann空間と言います) を取り扱う分野です。一次元では曲線、二次元では曲面等々です。

さて2点間を結ぶ最短線は、平面上では直線になりますが、例えば地球のような球面では北極と南極を結ぶ最短線は直線ではありません。Riemann空間における最短線を測地線と言います。空間の中の1つの三角形にいろいろな方向から光を当てると床に

いろいろな形の三角形が出来ます (これを三角形の射影変換と言います) 影となる三角形はいろいろな形に変形しますが縁である直線は直線に射影されています。すなわち直線は射影変換によって不変です。そこでRiemann空間において測地線を不変に保つような変換を射影変換と言います。当面の目標はこの射影変換を許容するRiemann空間を決定することにあります。多分このような空間は球面しかないのでありと予想されており、各国の微分幾何学者が取り組んでいます。

前任地の鹿児島には18年間おりましたので薩摩焼酎にはすっかり慣れ親しみました。薩摩芋から作った焼酎で独特の香りがあります。普通はお湯割りで飲みます。ロクヨンと呼ばれる薩摩焼きで作られたお



湯割り専用の器があります。当教室にはこれらが常備されておりますので興味のある方はいつでも大歓迎です。

体育大会実施される

恒例の学生主催による体育大会が、9月6日(木)に開催されました。

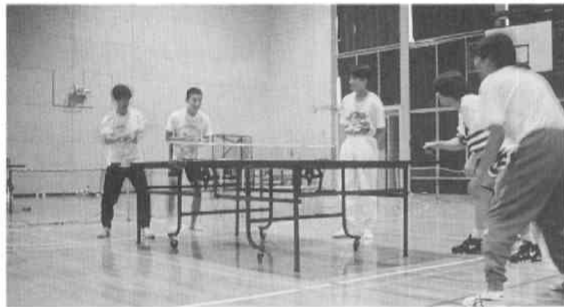
さわやかな秋空の下、学年の名誉をかけ、さらに賞品のビールとカップラーメンの獲得をめざし、卓球をはじめ各種目に熱戦が繰り広げられました。

なお、各種目の優勝学年は次のとおりです。

☆☆総合優勝2年☆☆

卓球	混合A	2年	バスケット	男子	5年
	混合B	3年	ボ-ル	女子	5年
		男子	2年	ソフトボール	
バドミントン	混合A	2年	つなひき		2年
	混合B	4年	リレー		4年

(学生課)



公開講座盛況のうちに終了

本年度の公開講座はニュー北海ホテルを会場に、10月3日から31日までの間、10回にわたり行われました。

これは、大学開放事業の一環として、市民に学習の場を広く提供する目的で毎年行われているものです。

今回のテーマは「骨と関節、運動とリハビリテーション」で、整形外科学講座の竹光教授が実施責任者となり201名が受講し、熱心にメモを取る受講者の様子から、今回のテーマに対する関心の強さが伝わってきました。(学生課)



(閉講式)

解剖体慰霊式

平成7年度解剖体慰霊式が、9月20日(木)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参加した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた176名(病理解剖45名、法医解剖79名、系統解剖52名)の方々の御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。(庶務課)



教官の異動

辞職	7.9.8	医学部	教授	太田庸起子
"	7.9.30	皮膚科学	助教授	松尾忍
昇任	7.10.1	眼科学	"	廣川博之
"	"	眼科	講師	門正則
"	"	放射線科	"	齊藤泰博
"	"	麻酔科蘇生科	"	高島治

スキー教室参加受付中

恒例のスキー教室(定員40名)を、今年も12月18日~19日の2日間にわたり北大雪スキー場で行います。締切間近(12月6日(木))です。早めの申し込みを待っています!(学生課)





窓外

柴田好

私の怖いもの

昔から怖いものとして「地震、雷、火事、親爺」の順で挙げられている。最初の地震については、奥尻島沖地震、阪神大震災と、続いて現実のものとなっている怖さなので言うまでもない。最後の「親爺」については最近怖さも減じているようである。私の怖いものといえば親爺は親爺でも「山親爺」である。どれくらい怖いかというと、今でも何度となく夢にまでみてうなされる怖さである。私の祖母は苫前町の出身であるが、この地の開拓時代に人喰い熊が現れ、数家族に被害を与えたことがある。妊婦や子どもを含む開拓住民の6人が喰い殺された悲惨な事件であった。この事件は吉村昭が書いた「熊嵐」として小説にもなり、三国連太郎主演により映画化もされているので、ご存じの方がおられるかも知れない。苫前町では町立博物館にこの事件について今も展示している。祖母から幼い頃に寝物語にこの話を具体的に聞かされているので、熊ほど怖いものはないと子ども心に思ったことが、ずっと潜在意識として残っている。

中学の頃はノルディックのディスタンススキーをしていて冬山を毎日のように走っていた。初冬のある日の夕方に、谷間の向こうに何やら動き回っている黒い物陰がみえた。最初は営林署の職員が山に入っているのだろうと考えていたが、目を凝らしてみると、熊に間違いない。全身から血の気が引いたような寒気が襲った。一緒にトレーニングしていた仲間も同時に気付き、全員振り向きもせず無我夢中、死に物狂いで山を駆け下りた。スキーを絡ませたような走りだったと思うが、きっと一番のタイムだったろう。飢えなどで冬眠に入れない熊の凶暴なことを大人から知らされ、そのシーズンは怖ろしくてもう山に入ることはできなかった。その後、スキー大会が近くになり、緊張してくると決まって夢を見るようになってしまった。熊から大急ぎで逃げて学校の校舎に入り、教室で仲間とほっと一息つくところで目が覚める。再び寝入ると今度は校舎の中まで入ってきた熊に廊下を追いかけられる散々な夢なのである。

学生の頃は試験日程が迫ってくるとこの熊の夢をみた。準備万端で余裕のあるときはこの夢に悩まされることはないのだが、ご多分に漏れず一夜漬けが常であるから酷いことになってしまう。追いつめられて今夜は夢を見ようだなと思うと不思議なことに眠気がさしてくる。勉強が思うようにできな

いで試験に臨む不安と、悪夢に悩まされる予感があっても眠気は容赦なくやってくる。

卒業して医者になっていてもこの悪夢からは逃れられることはなかった。学会の抄録の締め切りや、仕上げなければならない原稿の締め切りが近づいてくると例外なく人喰い熊に追いかけられる夢でうなされるのである。もっと早くから準備しておけば良かった…、もっと時間があつたらよいの…、こんな仕事を引き受けるのではなかった…、自分を恨み他人を恨んではやいても熊の悪夢はつきることはない。何かと理由をつけて仕事を締め切り間際まで引き延ばしてきたツケがまわってくるのである。

一閑話休題一

ある都会の小さな円形劇場の廃墟に、小さな女の子が現れました。その名はモモといます。この街は時間を泥棒する灰色の男たちに侵されてしまいました。かれらは盗み出した時間で生きているのです。モモは時間泥棒に戦いを挑みます。苦戦しましたが、後に現れた時の供給者マイスター・ホラの助けを得てモモは勝利します。(エンデ作『モモ』より)……

「誰も書かなかった白雪姫の復讐」(梁瀬光世著、学習研究社出版)にはこの『モモ』や白雪姫などの良く知られた物語、おとぎ話、昔話について意外な視点からの解釈を示している。この本を読んで最近考えたことであるが、いつも時間に追われてもう少し時間が欲しい、なんでこんなに時間が過ぎ去るのが早いのかとぼやいている私の周辺には「時間どろぼう」が存在するのかもしれない。この著書流に私の熊の夢のことを分析してみた。私自身は「時間どろぼう」でもあり『モモ』である。夢に現れる「熊」は時の供給者マイスター・ホラのシンボライズされたもの。こう考えると悪夢と考えていた夢は天啓に昇華することになる。怠惰に時間を浪費してしまう自分に、大事な時間のことを知らせてくれるマイスター・ホラと祖母の話してくれた昔話の怖ろしい熊を並べて考えるようになると、悪夢も捨てたものではない。『モモ』の物語の中でのマイスターのメッセージ

「人は自らの時間をどうするかは、自分自身で決めなくてはならない。」

締め切りや区切りのない人生は面白味がないのも事実である。しかし、締め切りに追われる日常は改めなければならない。蛇足ながら、この一文については締め切り前に書いているので例の夢は見えていない。

(内科学第三講座 講師)

「かぐらおか」第84号訂正のお願い

東医体の成績表を下記のように訂正願います。

- ・ソフトテニス(女子) 準優勝→ベスト8
- ・テニス(女子) ベスト8→準優勝
- ・バドミントン女子ダブルス(井原・角谷)
3位→準優勝